メーカー希望小売価格525,000円（本体価格500,000円）

●音源方式:SCM（Spectral Component Modeling）●鍵盤:88鍵NW-STAGE鍵盤（木製象牙調ウェイテッド鍵盤）●最大同時発音数:128音●パフォーマンス:プリセット=16×3バンク、ユーザー=16×3バンク、エクスターナル=16×3バンク●パート:2パート●ブロック:ピアノ・ブロック=17ピアノ・タイプ、モジュレーション・エフェクト・ブロック=10タイプ、パワーアンプ／コンプレッサーブロック=8タイプ●リバーブ:8タイプ●マスターEQ:5バンド●ディスプレイ:55文字×2行 VFD（蛍光表示管）●操作子:ピッチベンドホイール、マスター・ボリューム・ダイアル、ノブ1～6●接続端子:アウトプット=L/MONO、R端子（アンバランス接続の標準フォーンジャック）、L／R端子（バランス接続のXLR 端子）、ヘッドフォン（ステレオ標準フォーンジャック）、フット・スイッチ=サステイン、ソステヌート、ソフト、アサイナブル、フット・コントローラー=2、MIDI（IN／OUT／THRU）、USB（TO HOST、TO DEVICE）●付属品:電源コード、2P-3P変換器、ペダルユニット、保証書、「Illustrated Guide to the CP1」、取扱説明書、ソフトウェアDVD-ROM（Cubase AI）●外形寸法:1,385（W）×173（H）×420（D）mm●質量:27.2 kg

◀付属の専用ペダルユニット

● MIDIは社団法人音楽電子事業協会（AMEI）の登録商標です。 ● その他、このカタログに掲載されている会社名、製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。
● 製品の仕様およびデザインは、改良のためお断りなく変更する場合がございます。 ● 本カタログは印刷物のため、商品の写真と実際の色とが異なる場合がございます。
● この冊子はリットーミュージック社 キーボードマガジン 2010年SPRING号の記事を基に加筆・編集したものです。

YAMAHA
感動を・ともに・創る

機能・操作などのお問い合わせ
お客様コミュニケーションセンター　シンセサイザー・デジタル楽器ご相談窓口
ナビダイヤル **0570-015-808**
受付時間：月～金 10：00～18：00
土　10：00～17：00
（日・祝日・窓口指定休日を除く）
（IP電話、携帯電話、PHSからおかけになる場合:053-460-1666）
〒430-8650 静岡県浜松市中区中沢町10-1　http://www.yamaha.co.jp/support/digital_inst/index.html

■取扱店に関するお問い合わせ先
EKB・LM営業部東日本営業所　〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11　☎03(5488)5471
EKB・LM営業部中日本営業所　〒460-8588 名古屋市中区錦1-18-28　☎052(201)5199
EKB・LM営業部西日本営業所　〒542-0081 大阪市中央区南船場3-12-9(心斎橋プラザビル東館)　☎06(6252)5231

デジタル楽器・コンピューターミュージック製品 ホームページ	http://www.yamahasynth.com/jp/
ヤマハマニュアルライブラリー	http://www.yamaha.co.jp/manual/japan

音楽を楽しむエチケット　楽しい音楽も時と場合によっては、大変気になるものです。特に、夜間は小さな音でもよく通り、思わぬところに迷惑をかけてしまうことがありがちです。適当な音量を心がけ、窓を閉めたりヘッドフォンを使うなど、お互いに心を配り快適な生活環境を守りましょう。

ヤマハ株式会社
EKB・LM営業部 営業推進室
〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11
☎03(5488)5430

2010年4月作成　カタログコード　DE1225

Introduction~Summary of CP1
Story Behind the Birth of CP1
Sound Making with CP1
Artist Performs CP1
Artist Comment for CP1
CP5/CP50 Review

ミュージシャンを魅了するステージピアノ

YAMAHA CP1

最新鋭モデルに注入された技術と情熱を探る

ヤマハのステージピアノ“CP”は、
2010年を迎え新たなる方向へ進化を遂げた。
SCMという最新鋭の技術が注入されたこのCP1は、
“ピアノ・サウンド”だけをストイックなまでに追求。
原点に帰り開発された同機は、ミュージシャンの間でもすでに大きな話題となっている。
本企画では、その構造を解明し、さらにプロ・ミュージシャンたちに試奏してもらうことで、
“ステージピアノ”としてのCP1の真価を探る。
一線で活躍するミュージシャンたちの演奏したサウンドにも耳を傾けて、
ぜひその実力を一緒に検証していただきたい。

WEB連動
www.yamahasynth.com/jp/products/stage_pianos/cp1/

Introduction~Summary of CP1

新世代ステージピアノの背景とその構造

新開発の技術を多数搭載したCP1。
この高品位なステージピアノの構造をまずは探っていこう。

文:大山哲司／撮影:八島崇（＊）

CP1への系譜～継承される“ステージピアノ”のコンセプト

“1”。ヤマハのキーボードは、時代を象徴するようなフラッグシップ・モデルがこの栄光のナンバーを代々受け継いできた。古くはポリフォニック・シンセ時代の到来を告げたGX-1やFMシンセの先駆けとなったGS1、FM音源の最高峰DX1、世界最初のバーチャル・アコースティック音源VL1……。そして新たにこの番号を継承したのが2009年末、満を持して発売されたCP1だ。こうした系譜を見るだけでも、CP1の位置付けが分かるだろう。

その“1”に先んずる型番“CP”もまた栄光の歴史に彩られている。その起源は1976年にまでさかのぼる。グランド・ピアノと同じ打弦機構を持つ73鍵のCP70が発売され、音楽の歴史を変えるほどのインパクトをもって迎えられた。エレクトリック・グランドと呼ばれたこのCP70（写真①）は、実際にハンマーが弦を打ち、その振動をピックアップ・マイクで拾ってアンプで増幅するという方式の“電気ピアノ”。それ以前の金属片やリードを叩く打弦式エレピやアナログ音源方式のエレピと比べて、格段にアコースティック・ピアノに近いサウンドと演奏感が得られるということで、2年後の1978年に発売された88鍵モデル、CP80とともに特にステージで八面六臂の活躍をしていた。この“CP”を冠するエレピは、1980年代半ばまで発売されていたが、その後はよりアコースティック・ピアノに近い音色が得られるPCM方式のモデルが登場したことによって次第に姿を消していく。しかしその音色にはアコピとは異なる魅力があり、いまだに愛用しているアーティストも多い。

約30年の時を経て、2006年にCPの型番が復活した。CP300とCP33だ（写真②）。もちろん打弦式ではないが、ステージピアノというCP80のコンセプトを継承したモデルであり、今やリハーサル・スタジオ据え置きのピアノとしても多用されている。そして、CP1。その名称は、ステージピアノの最高峰であることを示しているのだ。

◀写真①　CP70。アコースティック・ピアノと同等の発音機構を持ち、ハンマーで弦を叩いて鳴らした音を、ピックアップで拾って出力する電気ピアノ。

▼写真②　現在のステージピアノの代表機種の1つ、CP300。AWM音源と88鍵GH鍵盤を搭載する。

最新鋭の音源～自由自在な音作りを実現したコンポーネント・システム

CP1に最初に電源を投入すると、やはりグランド・ピアノの音色が立ち上がる。ヤマハのコンサート・グランド・ピアノCFIIISをサンプリングしたサウンドがベースになったピアノ音色だ。ただ、普通のPCMピアノのサウンドとは少々ニュアンスが異なる。PCMピアノのサウンドが空気を突き抜けていくイメージなのに対して、CP1のピアノ音色は空気に溶け込んでいく。それを温かみのあるサウンドと表現しても間違いではないだろう。ソロ奏はもちろん、バンドとの親和性にも優れているはずだ。芯があり、埋没しない。まさにバンドで演奏するためのステージピアノといったサウンドになっている。

新開発の“SCM（Spectral Component Modeling）音源”が搭載されたCP1の音色（パフォーマンスと呼ばれている）は、4つのブロックから構成されている。ピアノ、モジュレーション・エフェクト、パワー・アンプ／コンプレッサー、そしてリバーブの4ブロックだ。楽器そのものに相当するピアノ・ブロックは、さらにピアノ・タイプとプリアンプから成り立っている。この4ブロックで作られたサウンドは、マスター・イコライザーを通して発音されるという仕組みだ（写真③）。実際のピアノの音がマイクで拾われ、PAに送られてエフェクト処理が施される。さらにその音が増幅されてスピーカーから出力され、ホールのアンビエントが付加されてリスナーの耳に届く。そのプロセスを4つのブロックでシミュレーションしているというイメージと言えるだろう。

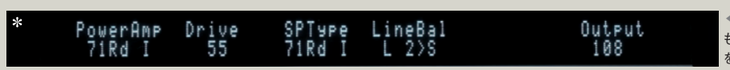
▲写真③　CP1の音色を構成する4つのブロックは、その流れに沿ってボタンで表示。ピアノ・ブロックは“PIANO”と“PRE-AMPLIFIER”からなり、“MODULATION EFFECT”、“POWER AMPLIFIER/COMPRESSOR”、“REVERB”と続き、そして最終段に“MASTER EQUALIZER”が用意されている。ボタンのインジケーターが点灯していると、そのブロックはオンになっている状態。

CP1では2種類のアコースティック・ピアノ（CFとS6）のほかに、金属棒を叩くタイプのエレピ（Rd IとRd II）と金属片を叩くタイプのエレピ（Wr）が用意。それらのエレピ音色は、年代別に搭載されており、Rd Iは71、73、75年製、Rd IIは78年製のほかDynoなどもある。またWrは69年製と77年製の2種類。さらにCP80、FM音源のDXエレピなどを含めて計17種類の鍵盤楽器音が搭載されている。これが先述のピアノ・タイプなのだが、要はCP1の中に17台の楽器が入っているというイメージだ。この17種類の楽器音に対して、ピアノ・タイプ以降のブロックで加工を施してパートと呼ばれる音色が作られる。

先に書いたとおりCP1ではピアノ・ブロック、モジュレーション・エフェクト・ブロック、パワー・アンプ・ブロック、そしてリバーブ・ブロックの4ブロックで音作りをする。ピアノ・ブロックで元となるピアノ・タイプを選ぶとそのピアノ・タイプに合わせたプリアンプが選ばれる。その調整パラメーターは、ピアノ・タイプごとに音作りするのに最も有効なものが設定。例えば、ピアノ・タイプにRdの音色を選ぶと、ディケイやリリース、ハンマーの硬さ、キー・オフ（離鍵時にダンパーが弦を押さえる音の大きさ）、ストローク・ポジション（ハンマーが叩く振動体の位置）など楽器の発音機構を元にしたパラメーターを調整できる（写真④）。モジュレーション・エフェクト・ブロックをオンにすることでエレピと共に使用することが多いフェイザーやコーラスなどのビンテージ・エフェクターをモデリングしたエフェクトをかけられる。さらにパワー・アンプ・ブロックにはエレクトリック・ピアノのスピーカーをモデリングしたシミュレーターが入っており、実際スピーカーから鳴らしたようなサウンドを作ることができる（写真⑤）。また、それぞれの調整パラメーターは、画面下の6個のノブに対応した“ツボをついた”6個のパラメーターが厳選され用意されている。

プリセット音色は、パートを2種類組み合わせたもので、2つのパートはパネル上のスイッチで簡単にオン／オフすることができる。最初に立ち上がるA-1“CF Grand”の音色も、実際は片方のパートにDXエレピの音色がアサインされているのだが、デフォルトではそのパートがオフになっている。つまり、グランド・ピアノで演奏していても、即座にDXエレピとのユニゾン・プレイに切り換えることができるというわけだ。

◀写真④　“PIANO”ボタンを長押しすると表示される、ピアノ・タイプの調整画面。プリセットB-1“Case 71”では、ディケイ、リリース、キー・オフ、ストローク・ポジション、ハンマーの硬さが調整できる。



◀写真⑤　パワー・アンプ／コンプレッサーの調整画面。こちらもボタンの長押しで表示される。ここではパワー・アンプのタイプをプリセットから変更することも可能。

優れた演奏性～新開発の鍵盤とシンプルかつ充実したコントローラー部

新開発の“NW-STAGE鍵盤”は、木製のピアノ・タイプ仕様となっており、打鍵時の振動やブレを抑えた鍵盤（写真⑥）。グランド・ピアノはもちろんすべての音色に対しての追従性が良く、どんなサウンドを弾いても全く違和感がない。鍵盤の表面も象牙調で滑りにくく、指先にしっくりなじむ。タッチの強さと出音の関係を調節するベロシティ・カーブも設定可能だ。

音色の変更は、パネル右側のボタンによって行う。例えば“Preset-A-9”というように、“バンク→グループ→ナンバー”の組み合わせで音色を変更する。PresetバンクのAグループにはCF、S6、CP、DX、BグループにはRd各種とWrの音色が搭載されており、それらを番号ボタンで変えていくという実にシンプルな操作性を誇る（写真⑦）。またマスター・キーボード機能も装備、鍵盤上に4つのゾーンを設定し、最大4つの外部音源を鳴らすことも可能だ。

CP1のパネル面でひと際目立つのが、中央部にある6個の大きなノブ。シンセサイザーならともかく、デジタル・ピアノではあまり見かけない操作子だ。ここにはあらかじめパラメーターが割り当てられており、回すことによって音色を変化させることができる（写真⑧）。割り当てられているパラメーターはパフォーマンスによって異なり、例えば“CF Grand”なら低域、中域、高域のイコライザー、ハンマーの硬さ、キー・オフ、リバーブの量の6つ。もちろんこの割り当てを変更することもできるので、キー・オフの代わりに、例えば減衰時間を調整するディケイなどを割り当てることも可能だ。ステージでは、会場の環境やバンド・サウンドのバランスによって、こうした要素が気になって演奏に集中できないというケースも往々にしてあるものだが、それが簡単に調整できるというのも、ステージピアノとしては優れている点。ノブ自体も大きく扱いやすい。

ハーフ・ダンパー対応の専用ペダルも付属。サステイン、ソステヌート、ソフトの3本ペダルとなっている（別売のサステイン・ペダルを使用する場合はFC3が必要）。また、アサイナブルなフット・スイッチ端子、フット・コントローラー端子2つを備えるほか、ソステヌート、ソフト・ペダルの端子もアサイナブルなので、演奏しながらさまざまなパラメーターを操作することも可能だ。加えて、USB端子なども装備。自分の音色セットを記憶したUSBメモリーを挿せば、ユーザー・メモリーに取り込むことなくプレイすることもできる。

最後にデザインにも触れておきたい。CP1は“ステージピアノ”と銘打っているだけに、ボディの表面は往年のCP80をほうふつとさせるレザー調の高級感あふれる塗装が施され、メタリックなトップ・パネルや木製のサイド・パネルなどの仕様も、ガッシリした印象だ。存在感ある丸みを帯びた“CP1”のロゴやなんと光る（!）ヤマハのロゴ、操作感の良い大きなノブは斬新。こうしたシンプルかつ革新的なデザインもCP1の大きな魅力の1つで、長く使い込むほどに愛着がわいてきそうだ。

▲写真⑥　新開発のNW-STAGE鍵盤は、安定した演奏性を実現。どんなタイプの音色にもしっかり追従し、表現力の幅を広げてくれる。

▲写真⑦　音色（パフォーマンス）を呼び出すには右端のボタンでバンクを選び、番号ボタンを押す。

▲写真⑧　画面下段の6つのパラメーターは、その音色を変化させるにあたって一番最適なものがあらかじめセットされている（任意のパラメーターに変更可能）。このプリセットB-1“Case 71”の場合は、ハンマーの打弦ポイント（StrkPos）や硬さ（Hammer）、出力音量（Volume）、パワー・アンプの歪み（Drive）、ビブラートの深さ（Depth）と速さ（Speed）がアサインされており、これらのパラメーターを中央の6つのノブで操作することができる。

Story Behind the Birth of CP1

開発者が語るCP1誕生ストーリー

SCM音源、NW-STAGE鍵盤をはじめ、さまざまな新技術が導入されたCP1。その誕生の経緯を、CP1開発グループのメンバーに語ってもらった。

確立された手法がないので 作ってはやり直しを繰り返しました

「フラッグシップのステージピアノです」

CP1のコンセプトについて尋ねると、製品開発プロデューサーの井出健介氏からはひと言こう返ってきた。言葉で言うのは簡単だが、“1番”のもの、何よりも優れたものは並大抵の努力では生み出せない。前機種のCP300／CP33の開発も手掛けた井出氏は、それでも“1番”にこだわった。

「古い機材をメンテしながら、ずっと演奏活動を続けていくのはなかなか難しいことです。そこで、ミュージシャンたちが、昔と同じサウンドをキープしてステージで自分の力を発揮できるように、簡単に持ち回れるキーボードを作ろうと思ったんです」

「今までCPシリーズは、型番が大きいほどハイエンドでした。だけど歴史的に、ヤマハのフラッグシップのモデルは名前に“1番”を使ってきたから……メーカーのこだわりを表したくて、ロジックを覆して“1”にしたんです」と意気込みを語る井出氏。しかし、開発への道のりはやはり厳しかった。開発グループのコンテンツ（音色）を担当した大高史嗣氏は、その過程をこう振り返る。

「精度の度合いがこれまでのモデルと全く違うものを目指していたんです。“SCM”と呼んでいる新しい技術は、今までにないタイプのものなので、確立された手法がまだなくて。とにかく作ってはやり直し、というのを繰り返しました。だから時間はかかりましたね」

CP1に搭載されたSCM（=Spectral Component Modeling）音源。実はこれは1つの音源方式を指す名称ではない。音源のモデリングを手掛けた三浦大輔氏はこう説明してくれた。

「周波数特性を解析して（スペクトラル）、演奏者の押鍵スピードに対して自然でリアルなサウンドを発音できたり、ピアノ・タイプ、エフェクト、アンプにはモデリング技術が使われており（モデリング）、これらを組み合わせ（コンポーネント）て自分ならではのカスタマイズができるようになっている、という特長を総称して“スペクトラル・コンポーネント・モデリング”と象徴的に呼んでいます」

「あえて言うならモデリングというジャンルの音源ということ以外は、1つ1つのピアノ・タイプごとに入っている技術が違う」と井出氏は言う。ひと言では表せない複雑なシステムなのだ。井出氏曰く、SCMは「出音主義、演奏の気持ち良さを重要視しているので、その音に最適な技術を必要なだけ採用してやっている音源」だそう。

やはり出音主義なので いかに音楽的な音であるかにこだわった

CP1の特徴として、いわゆるコンポーネント方式、エフェクト、パワー・アンプなどのブロックを抜き差ししたり、パラメーターの数値や種類を簡単に変えられるカスタマイズ機能があるが、音の大元となるピアノ・ブロックのピアノ・タイプとプリアンプの組み合わせだけは固定となっている（オン／オフは可能）。それは上述の“出音主義”によるものだ。「パラメーターの数も、画面一ページに収まるように厳選しました。その分、触れないパラメーターは十分に吟味されています。例えば、CF 3Band、S6 3Bandというピアノ・タイプのプリアンプの3Band EQはハイとローの周波数は変更できませんが、それぞれのピアノに合った別々のおいしい周波数がセットされています。」

そう語る大高氏は、「見えないところにパワーがかかっているんです。でも、シンセではなくてピアノなので、技術やスペックでアピールするより、気持ち良く弾いてもらえるところを目指しました」と続ける。CP1には、その“見えない”技術が隅々まで注入されている。「今までのCPはアコースティック・ピアノにより力を入れてきたのですが、今一度ステージピアノというところに重きを置いてみると、“エレピ”も非常に重要だと思ったんです」と井出氏が語るように、CP1はRd、Wrといったビンテージ系サウンドとCP、DXエレピなどのヤマハ直系のサウンドを搭載、充実のエレピ音色を持つ。そしてそこには、多くの技術が投入された。三浦氏は開発の流れをこう語る。

「例えばRdでは、プリアンプを開発する上で、モデルとなる楽器の回路図を入手することから始まりました。特徴のある楽器なのでモデリングをしっかりやろうとしたのですが、理論上で解析し実機そのものをモデリングしたとおり作っても、それがすべていい音になるわけではなかった。結局は作っては微調整を繰り返して、CP1の波形に合わせたトーンコントロールの特性になるように開発していったんです」

エレピ・サウンドで、特に重要視されたのが、“歪み”だった。ビンテージ楽器独特のウォームなサウンドは、内部回路が引き起こすナチュラルな歪みによることに着目した開発グループは、CP1のプリアンプでもその歪みを再現。「ヤマハには、アナログ回路のモデリング技術のVCMテクノロジーを開発して行く中で、歪みを再現する技術がたまってきていた。今回はそれを応用したんです」と三浦氏は説明する。その歪み具合は、モデリングした機種の年代によって異なる。またオート・パンの揺れ具合なども変わる。「ピアノ・タイプとプリアンプの組み合わせは固定にし、例えば、ピアノ・タイプが73 Rd Iでプリアンプは78 Rd IIというように自由に組み替えられる、シンセ的な発想でのエディットはあえてできないようにしました。」と大高氏。「例えばWrの音をRdのプリアンプで鳴らすとかができると商品的には面白そうには見えるかもしれないけれど」と井出氏は続ける。

「そのように自由に組み合わせたり、もっと細かくパラメーターを調整することは実現できますが、それが必ずしもいい音、ミュージシャンの求めている音につながらなかった。いろいろ議論はありましたが、最終的にはその出音で判断して、“組み合わせ固定”を選びました。そうすることで楽器としてのスウィート・スポットを外さないようにしたんです」

Members of CP1 Development Group

音源担当：三浦大輔

コンテンツ担当：大高史嗣

プロデューサー：井出健介

鍵盤担当：大須賀一郎

デザイン担当：佐藤大造

機構担当：安渡武志

すべての音色を爽快に弾ける 独自の価値観を持つ鍵盤を目指した

“スウィート・スポットを外さない”ことはすべてにおいて徹底された。例えばエフェクトでフェイザーをかけドライブを上げると乗るうっすらとした歪みや、パワー・アンプ部でのライン出力とスピーカー出力をミックスできるパラメーターなどもその一環だ。もちろんそのポリシーは、音源だけでなく、鍵盤開発においても貫かれた。プロデューサーの井出氏が目指したのは、“レスポンスが良く、ステージで疲れない”鍵盤。開発グループ、鍵盤担当の大須賀一郎氏に、そのNW-STAGE鍵盤開発の経緯について聞いてみた。

「クラビノーバの現行モデルに搭載されるNW（ナチュラル・ウッド）鍵盤は、グランド・ピアノの弾き心地を再現したGH（グレード・ハンマー）鍵盤の素性の良さをしっかり引き継ぎ、かつ細かな部分でいっそうの磨きをかけたもの。今回はそのNW鍵盤をベースにプロ級の人がライブ・ステージで親しみやすい方向にチューンナップし、アコピもエレピも爽快に弾ける、独自の価値観を持つ鍵盤を目指しました」

そのチューンナップとは、あくまでも弾き手の演奏感が重視されたもの。大須賀氏によると「ピアノを使い慣れた人が違和感なく受け入れることができ、かつライブで消耗することなく最後まで正確に演奏しきれる方向」にこだわって開発は進められていったという。

「それは単にピアノに似せればいいというものではないんです。本来電子楽器には相応しいタッチというものがあって。その一方、ピアノで練習を積み重ねた人が培った感覚を無理なく適用できる微妙なタッチでなくてはなりません」

そのタッチ感を実現するために、「ピアノとは異質の物理特性でもピアノっぽく感じる要素は残して安心感を与え、疲れにくく感じるための軽快な要素を盛り込むものの、コントロール性を失わない絶妙な質量感をキープ」したという。また人工象牙仕様は、単純に見た目のピアノらしさをもたらすだけでなく、指の汗のかきぐあいで鍵盤の表面との摩擦が変化するのを軽減してくれる特性もある。そういったさまざまな要素を盛り込み、音源との整合性もとることで、CP1に搭載されるピアノ・タイプそれぞれに対して“レスポンスが良く、ステージで疲れない”鍵盤は完成したのだった。

伝統を踏まえた上での 新しいCPのイメージを考えた

「音源や鍵盤の開発陣が“これはいいピアノになる”っていう絶対的な自負を持っていたんですね。その気合いに答えるようなものをっていうプレッシャーはありましたね」と言うのは、CP1のデザインを担当した佐藤大造氏だ。「ステージで“カッコイイ”デザインにしてくれとお願いした」と笑う井出氏は、「方向性としては昔のCP70／80のルックスを踏まえて、ステージで使うピアノなので、シンプルで余分なものが付いていない、機能美があったらいいなと思っていました」と語る。そのイメージを佐藤氏は膨らませていく。

「伝統を踏まえた上での新しいCPを考えたとき、黒のボディの上に、水平方向に端から端まで伸びる銀のパーツが乗るだけで、明らかにステージピアノの顔が作れるという直感があったんです。あともう1つ大事だったのは、フラッグシップたるモデルの風格の部分をどう演出するかでした。いろいろなディテールの集積が楽器全体のイメージを決めるので、塗装やツマミをはじめ、細かく作り込んでいきました」

佐藤氏とともに、外装を手掛けたのが安渡武志氏。既存製品のパーツを一切使わないというゼロからのスタートを切った2人は、細部にわたってこだわりを具体化させるために多くの試行錯誤を重ねる。安渡氏は言う。

「タフな仕事でした。全部が専用のパーツで、とにかく新しいものばかりで。塗装なども、何回もやり直しましたね。季節によって仕上がりが違うから、春夏秋冬、節目ごとに試していい条件を探し、やっと生産の仕様が決まるといった感じでしたね」

見えない技術は、外装にも数多く使われている。例えばその塗装。ヤマハ社内の塗装専門チームが開発中だった塗装法の情報をたまたま知った佐藤氏は、CP1に使えると確信、導入にこぎつける。そしてビンテージ感漂う、黒革調のルックスのボディが誕生した。また、サイド・パネルは木製にし、絶妙に木目が透けて見える塗装を施した。光る“YAMAHA”ロゴは安渡氏のアイディア。自動車の光るナンバープレートと同じ原理を使ったという。CP1のロゴは、車のエンブレムのような立体的で丸みを帯びたものにした。そんな見た目と同時に、彼らが大事にしたのが操作性だった。パネル部のレイアウトについて佐藤氏は語る。

「金属の部分にスイッチ類を集約させて、革調の部分とははっきり分けているんです。操作する部分と楽器としての表情の部分とを切り分けて。だから結構隙間なくスイッチは並んでるんですが、気を付けたのは演奏中に絶対間違えて押さないようにすること。そこで、ヤマハの電子楽器の中では、鍵盤の奥の垂直な立ち上がり部分を最も高くしています。段差をつけることで誤操作を防ぎ、プレイヤーが安心感を持ってプレイに集中できるようにしたんです」

「スイッチの塗装も金属となじむような色を選択して目に入ってくる情報を少なくし、プレイに集中できるという環境を作ったんですよ」と、シンプルさを追求したのは、単純に見た目の美しさだけではないことを教えてくれた。「楽器の見た目は、演奏者の気持ちを鼓舞するものでもある。だから、弾いていて気持ちいいと感じてくれたらうれしい」と佐藤氏。その気持ちは、開発メンバー全員が抱く思いなのだろう。大高氏は、今までにない完成度の音ができたと自負しつつも、「技術を評価してもらうのではなく、楽器としての音楽性を評価してもらいたい」と言う。

今春にはCP1に続き、CP5、CP50といったシリーズのその他のモデルも登場する。井出氏は「いろんな人に使ってもらいたいですね」と期待感を込めて語る。

「どの音を弾いても、自然と指が進むようにっていうところに最後までこだわりました。フラッグシップと聞くと、“自分にはピアノの腕がないから”なんて思いがちですが、CP1はどんな人でもいい音が出せるピアノ。ぜひ多くの人に弾いてもらいたいなと思っています」

Sound Making with CP1

CP1から生まれるステージ仕様のサウンド

解説・音源作成:安部潤／撮影:新木宏尚

搭載音色に最適なパラメーターを装備、自由度の高い音作りが可能なCP1。
ここではいくつかの音色をピックアップし、そのサウンド・メイキング法を解説していこう。

Profile

1993年にアレンジャーとしてデビュー。 伊東たけし、嵐、KinkiKids、リュ・シウォン、YUKI、女子十二楽坊、など多数の作・編曲、サウンド・プロデュースを手掛ける一方、映画主題歌や劇音楽、テレビやラジオのCM音楽の制作なども幅広く行う。また、ピアノ／キーボード奏者としても、ANRI、Ryu、池田聡など数々のアーティストのコンサート・ツアー・サポートや、その他レコーディングに精力的に参加している。

Impression towards CP1

僕自身、これまでピアノの音源は相当研究してきました。ソフトシンセもいろいろ使ってきましたが、やはり“弾く”ことを考えると、最終的にはハードの方がいいと思っていたんですね。このCP1はそのハードの良さに、メーカー持ち前の技術でソフトシンセ的なニュアンスも付加されているのがすごい。そして、入っている音はステージで弾くには理想的な音。こういうサウンドを待ち望んでいた人は多いと思います。もちろんレコーディングでも存分に使えますよ。生ピアノの場合、調律や楽器のコンディションなど、条件の違いでいい音で録れないときもある。でもCP1を使えば、現場の状況に合わせてすぐに調整できますから。

Sound 1
バンド・サウンドの中で際立つ存在感のあるピアノ

Track 01 / 02

“CF Grand”はプリセットA-1、CP1を立ち上げると鳴るピアノです（Track01）。ステージで弾くには理想の音ですね。キー・オフを上げて“コツコツ”した感じを強調すると、よりリアルな感じになります。ただバンドは大音量になりがちですし、そんなときに目立ちたい際には、もうちょっと硬い音にするとよいので、ハンマーの硬さを変更してみました（Track02）。激しい曲の中でがんがんソロを弾きたい、でも自然な響きでやりたいときに最適なサウンドだと思います。

▲キー・オフを13まで上げ、プリセットではNormalに設定されているハンマーをHard2と硬めに設定。

Sound 2
柔らかさを強調しソフト・ペダルで余韻を響かせる

Track 03 / 04

プリセットA-2に入っている“S6 Grandは”柔らかく、響きのきれいな音色です（Track03）。ここでもキー・オフを上げ、今度はハンマーの硬さを柔らかくしてみると、水の中にいるような、浮遊感のあるサウンドになります。さらにリバーブも足し、ソフト・ペダルを踏んで弾いてみました（Track04）。余韻がとても心地良いですよね。シンガーと2人で静かなバラードをやると、とてもしっくりきそうなサウンドです。実はこの音は、この間レコーディングでも使用したんですよ。

▲キー・オフは＋16とかなり強調し、ハンマーはSoft2の柔らかめにする。

Listen to CP1 Sound
www.yamahasynth.com/jp/products/stage_pianos/cp1/

Sound 3
フェイザー・サウンドにリバーブを足して広がりを作る

Track 05 / 06

Rdの音では、プリセットB-2の“Case 73”を紹介しましょう。これは、モジュレーション・エフェクト・ブロックをオンにすると、Small Phaserというフェイザーがかるんですが、当時のサウンドを思わせとても好みです（Track 05）。さらにリチャード・ティー風な音を目指して、リバーブを足してみることにしました（Track06）。白玉で弾くときれいに響くので、やはりバラード、音色で聴かせるような曲にぴったりでしょう。さらにバンドに入ったときはハンマーを固くすれば、より音が立ってくると思います。

▲伸びがある響きのプレート・リバーブ、“RichPlt”を選択。リバーブ・タイムは2.0sに、センド量は中間くらいの65に。

Sound 4
パワー・アンプで歪みを出しロックなサウンドに

Track 07 / 08

Wrの音も試してみましょう。ここではプリセットB-16、“77 Tremolo”を選択しました。これは名前のとおりトレモロのかかったサウンド（Track 07）。キー・オフやパワー・アンプのドライブを上げるとゴツゴツした音が目立ち、いい感じになりますね。スタッカートの音を弾きたくなります。それから、パワー・アンプのライン／スピーカーのバランスを変えてみます。プリセットとかなり違いが出ますね（Track08）。ブルージーな質感の楽曲で、ギターに対抗できる音色じゃないでしょうか。

▲パワー・アンプのドライブを60に上げ、ライン出力（L）とスピーカーの出力（S）のバランスをスピーカー寄りの63にし、歪みを強調。

Sound 5
プリセットのままの音を使い当時の雰囲気を演出

Track 09 / 10

CPのサウンドを一聴して“懐かしい!”と思いました。プリセットのままの方が当時の雰囲気を出せそうなので、そのままの音を紹介します。このCP1の面白いところは、年代別のCPサウンドが入っているところ。A-9の“CP80Studio”（Track09）は80年製、A-10の“CP80 Live”（Track10）にセットされている波形“CP88”は今の時代にCPを作ったら、というモデリング・サウンド。同じCPなのに結構音が違うのが興味深い。CP80 Liveの方がふくよかな印象がありヌケが良いため、ライブ向けなんでしょうね。

▲画面を見ると、CP80 Liveには“CP88”というCPのピアノ・タイプがセットされていることが分かる。

Sound 6
816サウンドを使ってゴージャズに鳴らす

Track 11 / 12

DXエレピは、プリセットA-14の“DXEP 1”が一番分かりやすいと思ったので選んでみました。この音色にはもともと、“816Chorus”というコーラスがかかっています。あのTX816でDX音源8台分をデチューンさせて実現していたコーラスを再現したものです。まずはそれをオフしたサウンド（Track11）。そして次にエフェクトをオンにして鳴らしたのがこちら（Track12）。ゴージャスな感じを出すため、ミックス・レベルは最大の127に設定してみました。心地良いデチューン感が出せたと思います。

▲ミックス・レベルは最大の127に、フィードバックも20に上げる。

Sound 7
バンド・アンサンブルの中でも映えるレイヤー音色

Track 13 / 14

プリセット・バンクのCには、ステージで使える効果的なレイヤー音色が入っていますが、その中から2つほど紹介しましょう。C-11“FunkyWurli”は、WrとDXエレピの音を重ねたもの（Track13）。DXエレピにはタッチワウがかかっておりクラビっぽい音になっています。ギターのようにパーカッシブに弾きたいときにいいですね。また僕が特に気に入っているのはC-16“What a CP!”（Track14）。CFとRdの音のレイヤーですが、非常にバランス良く、バンドの中でも引っ込まずに響いてくれそうです。

▲“What a CP!”は、パート1に“CF 3Band”、パート2に“75Rd I”がレイヤーされた音色。

Artist Performs CP1

プロ・ミュージシャンが体感するCP1の表現力

多くの現場をこなすミュージシャンたちにCP1はどう映るのだろうか。それを探るべく、今回4人のプロにCP1を試奏してもらった。付録CDに彼らのプレイも収録したので、そのコメントと併せて、CP1の表現力を体感していただきたい。まず登場するのは、ピアニスト／作・編曲家／プロデューサーの島健。長いキャリアにわたって、ピアノやローズなどの楽器を弾き続けてきた彼はCP1の音をどう受け止めるのだろうか?

撮影:八島崇

島健

自分なりのカスタマイズができて触りがいのある楽器ですね

Profile

1978年に渡米。L.A.を中心にジャズ・シーンで活躍。86年に帰国後はスタジオ・プレイヤーとして数千曲に及ぶレコーディングに参加する一方、ササンオールスターズ、浜崎あゆみなど、日本を代表する数多くのポップ・アーティストの編曲やプロデュースを手掛ける。さらにクラブ系やクラシック系のミュージシャンとのコラボレートや、映像やミュージカルの作曲など、ジャンルを超えて幅広く活躍している。

CP1の開発者がかなりエレクトリック・ピアノがお好きな方だと伺いましたが、音を聴いて実際いじってみて“イエイ!”って感じですね(笑)。僕は、もともとローズが好きで、もちろん持っていたし、実際に内部をいじったりしていたんです。だからローズに関しては結構こだわりがあるんですが、CP1では、蓋を開けてピックアップの位置を動かすといった、実機でやっていたようなことがいろいろできるんです。すごく楽しいし、開発者のこだわりが伝わってきました。エレピのサウンドをこれだけ細かく調整できるデジタル・ピアノってないですよね。また、ビンテージの楽器は、バランスのいい鍵盤アクションのものを見つけるのが大変なんですよ。そういう意味でも非常に価値のある製品ですよね。

グランド・ピアノの音色に関しては、ベロシティの追従性がいいというか、弾いた感じがちゃんと伝わる感じがありましたね。微妙なタッチに応えてくれて、ピアニッシモの表現が細かくできます。あと、ダンパー・ペダルを踏んだときの共鳴を再現する“ダンパー・レゾナンス”のパラメーターをちょっと上げると、生のピアノの高音の響きの雰囲気がかなり出せたのには驚きました。

僕がこれまでデジタル・ピアノをあまり好きになれなかった理由が、アクションがどうしてもグランド・ピアノのものとは違うので、弾いていると違和感があったからなんです。だけど、このCP1の鍵盤は、弾き切ったときにカクンとくる、グランド・ピアノのハンマー・アクションに近い感触があります。木製鍵盤だし、そういった点でも違和感がない。かなり自然ですね。

操作も簡単ですね。あとはペダル。3本ペダルは、やはりピアノ弾きには必需品。生ピアノのソフト・ペダルの雰囲気を、デジタルで再現しているものはなかなかないですけれど、CP1のペダルはかなり近いものがありますね。すごく生のピアノに近くなった、という感じが総合的にします。

僕がステージで使うとしたら、やっぱりRdの音色をメインに使うかな。かなり自分なりのカスタマイズができそうだし、触りがいがある。昔はカツンカツンの音の方が好きだったんですが、年を重ねるごとに柔らかい音の方が好みに(笑)。もちろんCP1では、その両方の音が簡単に出せますからね。

Played Sound

Track 15

プリセットA-1“CF Grand”を弾いたとき、ピアニッシモの表現力があると感じたので、繊細な曲が合うと思いこういったメロディを弾いてみました。ダンパー・レゾナンスを少しだけ足し、ピアノの高音の“コキン”ていう響きを出してみましたね。

Track 16

B-3“Case 75”を選び、ハンマーの硬さを柔らかく、ストローク・ポジションをTop1に変え、さらにD Chorusというコーラスをかけました。フワッとした空気感を生かし、コードの響きを出すために弾いてみたのがこのトラックです。

Listen to CP1 Sound www.yamahasynth.com/jp/products/stage_pianos/cp1/

プロデューサーとして、キーボーディストとして、多数のアーティストを手掛けてきた井上鑑。さまざまな状況に合わせて音作りを行ってきた彼は、どのようにCP1を評価するのだろう。すでにライブでCP1を使用したという井上にその印象を聞いた。

撮影:八島崇

井上鑑

目に見えない部分までしっかり作られているのが素晴らしい

Profile

桐朋学園大学在学中から音楽活動を開始。1981年に寺尾聰「ルビーの指輪」でレコード大賞編曲賞を受賞。同年ソロ・デビュー。2006年に13枚目のソロ・アルバム「CRITERIA」を、2009年最新プロデュース作品「ISSIMBOW」をリリース。またアレンジャー／プロデューサーとして、大滝詠一、井上陽水、福山雅治、本田美奈子、吉田兄弟、佐野元春らの作品やライブに参加。海外アーティストとのコラボ作品なども発表している。オフィシャルHP: www.akira-inoue.com/

第一印象は、とにかく今までのものと比べてシンプルで、本当に楽器っぽい作りだな、ということでしたね。ピアノに特化しているというのが、すごくはっきりしているなぁと思いました。

グランド・ピアノ音色に関しては、奥行きがあるものに仕上がっているという印象でした。“ヌケがいい”ということだけを追い求めたものではないというのも分かります。音の“重さ”みたいなものも感じられて。また、ハンマーの硬さとか、普通のデジタル・ピアノにはない細かい設定ができるのは面白いですよね。あと鍵盤が新開発のものになっていて、タッチがすごく自然になっていますね。

エレピはいろいろ入っていますが、年代ごとに違う音になっているのは面白い発想だと思いました。ローズやウーリッツァーなど、元の楽器を知っている人だったら曲によって使い分けるとか、いろいろ遊べますよね。で、これもまたハンマーが叩く位置などそういう細かい音色作りができるので、プリセットのサウンドを微妙に変えて、自分の好きな音を作るという楽しみもありますよ。そういう意味でとても楽器的だと思います。どういう音楽をやるかによって、その楽器の特性を生かしながら“チューニング”ができるっていう。

操作性に関しては、たくさんのことをエディットするようにできている楽器ではないので、直感的にいじれると思います。プリセットを選んで表示されるパラメーターだけで、音のキャラクターは結構変えられるように設定されているので、シンセサイザーに詳しくない人でも問題なく操作できるでしょう。

実はすでにライブで使ったりしているのですが、今後も使っていくと思います。基本はピアノとエレピ系、Rdの音がメインになるかな。CPもキャラクターの強い音なので生かせると思います。いろんな音の組み合わせを試してみるのも面白いですよね。例えば片方の音だけ極端にアタックのある音にしてみるとか、いろんなことが試せるはずです。

プロのレベルでうれしいポイントは、キャノンのバランス・アウトが装備されているところ。音を受ける側の機材クオリティにあまり左右されず、いつでも安定した音を出せるのは大きい。上位機種として、目に見えない部分もしっかり作ってくれているのは素晴らしいと思います。

Played Sound

Track 17

“CF 3band”と“DXEP1”のレイヤー音色。“DXEP1”は“78 Rd II”のパワー・アンプで鳴らしていて、そのキャラがよく出ています。ローをだいぶカットしているので、低音を弾くとほとんどCFの音だけで、高音にいくとエレピっぽい音が見えてくるという。

Track 18

これはプリセットのままの音ですね。B-4“Case 78”です。こういう音色は好みなんですよ。柔らかい響きを生かして弾いてみたフレーズです。奥行きがある音色なので、こういった静かな曲で使うのにはぴったりですよね。

Listen to CP1 Sound www.yamahasynth.com/jp/products/stage_pianos/cp1/

堀江博久

表現をする上で想像力をかき立てられる楽器だと思います

次に登場するのは、現在の日本のバンド・シーンの第一線で活躍するキーボーディストの堀江博久。ライブハウスから大型フェスまでさまざまな舞台に立ち、多くのレコーディング経験を持つ彼は、CP1をどのような楽器ととらえたのだろうか。

Profile

The Cornelius Group、LOVE PSYCHEDELICOをはじめ、caravan、Curly Giraffeなど、さまざまなアーティストとのセッションを行う。またCoccoとくるりによるsinger songer、高橋幸宏の呼びかけによるpupaなどのバンド・メンバーとしても活動。さらにthe HIATUSのピアノ、および制作総指揮としてライブ／レコーディングともに参加。既存のジャンルの枠を超えた幅広い活動を行う。

撮影：堀田芳香

僕は普段ステージでは、ローズとウーリッツァーの実機を弾くんです。CP1のRdとWrを弾いてみると、ざらついた感じの中にすごく奥ゆかしさが出ていて……ただ歪ませた感じではない音になっていますよね。これまでのステージピアノでは表面的に歪ませてビンテージ感を出しているようなところがあったけれど、CP1では音に空間が出ている感じがいいと思いました。ローズやウーリッツァーは、楽器の構造上プリアンプのところから歪んでいます。その歪み感をデジタルで出すのを、今まではエフェクトでやっていたので、どうしても後付けしたような感覚があったけれど、CP1にはプリアンプとパワー・アンプがある。デジタルでのエレピの音作りの選択肢が増えましたよね。

ピアノは、すごく弱いところから中間くらいまでのタッチの音の表現力がとても豊かですね。非常にふくよかな感じがしました。新しい鍵盤はステージピアノにしては軽めの鍵盤ですが、たぶんピアニストの人はもうちょっと重さというか硬さを求めるし、ライブでいろんな音色を弾くキーボーディストからすればそこまで重いものはつらかったり、その間をとるのはすごく難しかったはず。でもこのCP1は軽くして弱いベロシティを出せるようにしたことでダイナミック・レンジを広げたそうで、それが弾き心地だけでなく、音をふくよかに感じることにもつながっている気がします。音色はすごくよく作り込まれてはいても、ここまで表情が付けられる鍵盤はなかったですよね。

レコーディングなどの現場では、キーボード本体ではあまりエフェクトをかけたりせず、アウトボードを通して音作りをすることも多いんです。そう考えると楽器の素の音が良くないといけないんですよね。CP1は素の音でも十分いい。それに加え、いろんなパラメーターで音がいじれるので、楽しみが増えますよね。サウンドの変化も分かりやすいし、少ない操作子で自分の持てる力を引き出せる感じがあります。好きな音、求めている音にすぐたどり着ける。今回の試奏のような短い時間でもいいなと思ったのは、そういうふうに直感的に使えるからなのかもしれません。単純に音作りするという以外でも、何か表現する上で、想像力をかき立てられる楽器だと思います。

Played Sound

Track 19

A-1 “CF Grand” の音を、同じパターンのフレーズで強弱を変えながら弾いてみたけれど、すごくダイナミック・レンジを感じましたね。EQなどもいろいろ調整してみたんですが、ここはそのままの音で弾いて収録することにしました。

Track 20

Wrの音、B-14 “Loud 6×9s” を選択。ストローク・ポジションをTop2に変えて、またハンマーを硬くしてふくよかながらアタックのある音に。さらにパワー・アンプのドライブを上げ、スピーカー出力の割合を増やしました。いい歪み具合では？

Listen to CP1 Sound www.yamahasynth.com/jp/products/stage_pianos/cp1/

最後は、その確かなプレイが多くのアーティストからの支持を得ているキーボーディスト、YANCYにCP1を試奏していただいた。“CP1からインスパイアされて作った” というそのテクニック満載のデモ・ソングをぜひ堪能してほしい。

Profile

さまざまなアーティストのレコーディングやライブ・サポートを行う一方、アレンジャーやプロデューサーとしても活躍するキーボーディスト。ブルース・ハープとのユニット、kotez&yancyやピアノ・ユニット、クレイジーフィンガーズなどのほか、シンガー・ソングライターとしても活動。2008年にはソロとしては2枚目となるアルバム『TASOGARE-JOHN』をリリースした。

YANCY

音が “ここで鳴っている” 感じがして今までにないリアルさがある

撮影：八島崇

ついにこういうところまできたんだなと。以前はステージピアノというと、パワーの部分ばかり強調されていたんですが、CP1を弾いていると弦や響板の響きを感じながら心地良く弾けますね。そして、ダイナミクスの幅がすごいと思いました。だからある意味、すごくテクニックが必要とされてくる。弾きこなすには、ピアニストとしての力量が試される楽器だと感じました。その分ミュージシャンとして真摯に向き合える楽器ですね。

プリセットのピアノ音色は十分素晴らしいですが、面白いのは、それに対してEQを調整したりすると全然違ったキャラクターになったりするところ。ハンマーの硬さとか、ピアノの機構にまつわるパラメーターを選べるのもいいですよね。僕は、キー・オフの設定値を上げて、鍵盤を離したときのダンパーが弦を押さえる音にも耳を澄ませながら、静かな曲を弾いたりするとすごく気持ち良くて好きですね。

Rdの音は存在感があり、ビンテージの楽器に引けをとらないと思いました。ローズの年代別のアンプ・シミュレーションもすごいですよね。僕はいろんなローズを弾いてきましたから、それぞれを聴いてみるとなるほどなって思います。いわゆる昔の名盤の音もすぐに再現できるのに加えて、例えば78年製の音を73年製のアンプで鳴らすとか、組み合わせで新しいこともできる。エフェクターも王道の使い方がプリセットされていますけど、そうじゃない設定にもできますから。発展性があっていいと思います。

ウーリッツァー系の音、Wrもすごくいい音でしたね。CP1の音は “ここで鳴っている” 感じがするというか、実機のスピーカーから鳴っているような感覚がある。間に空気感が入り過ぎてないんですよね。音が似ているのももちろんありますが、そういった意味でも今までにないリアル感があるんですよね。歪みについても同じことが言えますね。

CPの音もすごい。懐かしい音！　DXエレピもまさにこの音です。弾きやすいですし。この音のクオリティでレイヤーやスプリットができてしまうのもすごいですよね。外部音源をゾーンごとに割り当てたりもできるし。

音も厳選されていて、本当に “ステージピアノ”。バンドのライブでももちろん使えますが、アコースティック・ギターとウッド・ベースでのトリオなど、アコースティックなライブで威力を発揮しそうですね。

Played Sound

Track 21

A-1 “CF Grand” のキー・オフを最大値に設定。低音弦の響きの素晴らしさと、静寂の中で高音を弾いたときの響板の響きとダンパーの音のリアルさ、フルパワーで鍵盤を弾いたときの楽器の持つポテンシャルをゴスペル・スタイルで表現してみました。

Track 22

音色はプリセットB-2 “Case 73” のままです。73年製は僕の愛用するフェンダー・ローズと同じです。このモッサリした音色をここまでリアルに再現できたキーボードは初めてだと思います。フレーズも70年代前半のスタイルで弾いてみました。

Listen to CP1 Sound www.yamahasynth.com/jp/products/stage_pianos/cp1/

Artist Comment for CP1

CP1プレイヤーによるインプレッション・コメント

多くのプレイヤーに注目されているCP1。
すでに同機のユーザーとなっているプロたちにその印象を聞いてみよう。

財津和夫

すごくバランスが良く全体のオケもよく聴こえる

Profile
1948年2月19日生まれ、福岡県出身。1972年、東芝レコードよりTULIPとして「魔法の黄色い靴」でデビュー。1978年からソロ活動をスタート。8年ぶりとなる最新ソロ・アルバム「ふたりが眺めた窓の向こう」発売中。現在、全国ソロ・ツアー中で、ヤマハCP1を使用。詳細は、財津和夫オフィシャルサイトまでwww.zaitsukazuo.com/

PAモニターから返ってくるピアノの音が良い音をしてる。サンプリングが良いのか、弦のバランスが良くて、音の境目が気にならない。どこかが聴き取りにくくなるとか、違う感じになることがないので、すごくバランス良く全体のオケも聴こえてくる。（財津和夫）

これまでメインキーボードをS90 ES、音源にはMOTIF-RACK ES、MOTIF XSといろいろと使ってきました。CP1は、サンプリングの切り替わりも気にならずにとても滑らかで、さらに音抜けがとても良いんです。だから各会場での音作りがとてもしやすい！　ピアニッシモでも旋律がきれいに聴こえてきます。（テクニシャン・筧敏彦）

槇原敬之

僕の願いを叶えてくれるキーボードに出会えました

Profile
1969年5月18日生まれ、大阪府高槻市出身。血液型O型。1990年デビュー。自身で作詞、作曲、アレンジすべてをこなし、これまでに40枚のシングル、16枚のオリジナル・アルバムを発売している。コンサートではフルオーケストラとの共演など、毎回趣向を凝らしたステージを披露。他アーティストへも多数の作品を提供している。2010年、デビュー20周年を迎えた。現在、9匹の犬と暮らしている、大の愛犬家。オフィシャル・サイトwww.makiharanoriyuki.com

僕はテレビやコンサートで、自分のマスター・キーボードとしてヤマハCP300を使っていました。でも実は、よりピアノの音色に近い音が出るキーボードが出ないかとひたすらずっと願っていたのですが、CP1を弾いてみて、遂に僕の願いを叶えてくれるキーボードに出会えたという感じがしました！

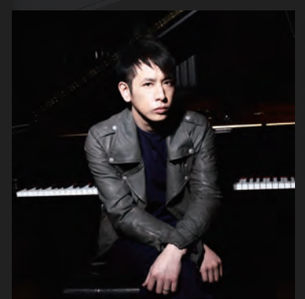
大きさもちょうどよく、いろんな種類の音が必要レベルにとても良い音色でそろえられていて、なおかつ弾いた感じと音が出るタイミングにあまり誤差を感じないというところが、このCP1をとても気に入った理由です。本当に素晴らしいと思うので、ぜひいろんな方に使ってほしいですね。僕はこの先、CP1をマスター・キーボードとして使いたいと思います！

福田裕彦

圧倒的にプレイヤー・フレンドリー!!

Profile
1957年東京都出身。80年代は主にスタジオ・プレイヤーとして1000曲以上のレコーディングに参加。90年、小泉今日子「見逃してくれよ！」でオリコン1位獲得以降は主に作編曲家として活動。ゲーム音楽、アニメ音楽も多数制作。98年以降、浜田省吾ツアーのキーボード、ストリングス・アレンジを担当。03年、PS2ゲーム「Over The Monochrome Rainbow」の企画、総監督を務める。（株）大頭（だいず）主宰。株式会社大頭オフィシャル・サイトwww.daiz.tv/top.html

とにかく弾きやすい。圧倒的に弾きやすい。もうビックリ。これが、CP1に関する僕の最も率直な感想です。例えば、どうしても特殊な精神状態に陥りがちな大規模アリーナでのライブなどで、鍵盤に触って音が鳴ったとたんに落ち着くという“電子楽器”は、少なくとも僕にとっては存在しませんでした。特に“電子ピアノ”のジャンルでは、従来の“ピアノタッチ鍵盤”に込められたエンジニアリング上の意思が、しばしば鍵盤を叩く指を必要以上に跳ね返し、ステージの緊張感の中でその感覚を手なずけるのには、ある程度以上の時間が必要でした。しかしCP1ではその必要が全くありません。音色とタッチの関係がとにかく素直で、この音をこう出したい、という意図が実にストレートに反映され、余分な思考が入り込むスキがない。優れたアコースティック楽器のように、演者が演奏に集中できるのです。驚異的にプレイヤー・フレンドリーなキーボード、と言えるでしょう。



Photo：Yoshioka Horita

伊澤一葉

フルレンジで鳴らしても均等に音の艶を感じます

Profile
1976年7月4日生まれ、倉敷市出身　4歳からピアノを始める。中学2年生よりギターを始め、それと同時にバンド活動開始する。高校生時代からボーカルも務める。大学入学と同時に上京。新たなバンドとともに作曲活動も行う。2004年末、バンドあっぱを結成。2005年初夏より東京事変に参加。

以前CP300を使っていましたが、CP1のグランド・ピアノの音色はより生ピアノの音色に近付いていると感じました。フルレンジで鳴しても均等に音の艶を感じます。エレピの音色についても、デフォルトのサンプリングもそうですが、スピーカーやエレピの年代まで選べて素晴らしいと思います。タッチ感も本物を弾いているような心地になります。プリアンプとパワー・アンプが付いているのでバンド・サウンドでの音色決めなどでは重宝しています。

新しい鍵盤は主にエレピ音色でのタッチ感が気に入っています。キー・オフの繊細なサンプリングが弾き手のプレイを大きく助けてくれると思います。ピアノ音色での鍵盤の浅さはベロシティの加減で対応しています。デザインもマットな質感でお洒落さんだと思います。

CP1をもっと使い込んで早く自分の楽器にしたいと考えています。細部まで潜れる分、追求は弾き手のポテンシャルに委ねられます。

松本圭司

これほど演奏するのが楽しいデジタル・ピアノは初めて

Profile
1973年4月12日札幌生まれ。高校卒業後に活動を始め、葉加瀬太郎グループなどを経て、1999年よりT-SQUAREに加入。2000年にバンド脱退後、2003年に1st ソロ・アルバム『Life』をリリースし、その後自身のレーベルbootrecordを設立、数枚のアルバムを発表している。また、他のアーティストの作品のアレンジを手掛けるほか、これまでゴスペラーズ、東儀秀樹、中島美嘉、akiko、キリンジ、森山直太朗、矢沢永吉、槇原敬之などのライブ・サポートも行っている。

ヤマハCP1に初めて触れたときに、まず鍵盤の感触に驚きました。今までのデジタル・ピアノは軽過ぎたり不自然な重さがあったり。しかしそれでもヤマハのタッチはこれまでとても感触が良かったのですが、CP1は木製鍵盤のおかげなのか、適切な重さで指に負担がかかりません。

さらにエレクトリック・ピアノのモデリング・サウンドの鍵盤に吸い付くような感じ、これは現時点でのエレピ・モデリングの最高のものでしょう。それぞれ時代のものをうまくエミュレートしており、細かいセッティングも可能で、いろいろなシチュエーションにマッチします。トーン・バーの挙動を本当にうまく再現してあって、これも優秀な内蔵エフェクトと組み合わせると、どの時代の音色も再現することができると思います。

アコースティック・ピアノの音色もとてもうまくチューニングされていて、出力のDAのおかげなのか、とても存在感のある音色です。クラシカルな音色から、ジャズ、ロック、ポップス、どのジャンルでもチューニング次第でうまくフィットします。

早速いろんなステージ、レコーディングで使用していますが、エンジニアの方の評判も良く、仮録音時に使用し、後にアコースティックで置き換えようと思っていたものも、この音の方が良いということになったこともあります。これほど演奏するのが楽しいと思えたデジタル・ピアノはこのCP1が初めてです。

CP5/CP50 Review

CPシリーズ・ラインナップ紹介

新たなCPシリーズのラインナップとして発表されたCP5とCP50。
選択肢の幅を広げてくれる2モデルをここではレビューしていこう。

文:大山哲司

CP5

メーカー希望小売価格 288,750円（本体価格275,000円）

CP1の音源システム／鍵盤を受け継ぎ 多彩な音色を装備するハイパフォーマンス・モデル

ピアノ、エレピ・サウンドに加え さまざまな楽器音が305種類用意

CP5はCP1の単なる下位バージョンではない。CP1と同じ音源システム“SCM”を搭載し、基本的な構造は継承しながらも、楽器としてのコンセプトは少し異なっている。組み合わせて弾くことを楽しむ鍵盤楽器、それがCP5のコンセプトと言ってもいいだろう。

それを象徴しているのがフロント・パネルの左側に配置された6個のノブ型操作子だ。CP5には2種類のアコースティック・ピアノと、金属棒や金属板をたたくタイプ（RdとWr）、往年の名器CP80のような打弦式エレピ、DXシリーズに代表されるFMピアノなど17種類のエレクトリック・ピアノのボイスが用意されている。それらのボイスに対してハンマーの硬さ、打弦ポイントなどのパラメーターやアンプ、エフェクトといったコンポーネントのパラメーターを調整することによってオリジナルのピアノ音色を作っていくことが可能。さらにCP5の大きな特徴は、それに加えてギターやベース、ストリングス、ブラス、シンセ・リード、シンセ・パッドなどの楽器音が305種類用意されており、それらの楽器音をピアノ音色と自由自在に組み合わせて実際に演奏する音色（パフォーマンス）を作れることだ。

音のオン／オフや調整が 弾きながらでも瞬時に可能

CP5にはマイクに割り当てられた1パートを含めて6つのパートが用意されており、そこに楽器音を割り当てて演奏する。左側の6つのノブは、そのコントローラーだ。ミキサー的な感覚で各パートの音量バランスを調整できるほか、ノブ下のボタンで各パートのオン／オフもワンタッチで行える。 スプリットの設定もパネル上のボタンでオン／オフすることが可能だ。一番左のノブは、背面のマイク端子に接続されたマイクから入力された音に割り当てられているので、ピアノ弾き語りなどの時は、声と楽器音のバランスを簡単にとることができる。オーディオ・ファイルを読み込んで再生することも可能なので、パソコンなどで作り込んだオケをバッキングとして流しながらピアノ弾き語りをすることも、本機1台のみで実現できる。

ピアノ演奏中に、“音を調整したいな”と思うことは多々あるが、その場合の多くは音の明暗と余韻の長さだ。もちろんアコースティック・ピアノでは不可能だが、CP5ではそれさえも簡単に行えてしまう。フロント・パネル右手にある5つのノブは、5バンドのマスター・イコライザー。これによって、ピアノ伴奏だけによる曲の冒頭では低音を強調し、バンドが入ってきてからは低音を控えめにして高音を強調するといった音色コントロールも簡単に行える。また中央に配された3つのノブにはパラメーターを任意にアサインすることができ、例えば“Release”を割り当てておけば、余韻の長さを細かに調整しながら演奏することも可能だ。このように、CP5はステージ上でのピアノ演奏をサポートする機能を満載したハイパフォーマンスなステージピアノである。

CP50

メーカー希望小売価格 198,450円（本体価格189,000円）

高品位なピアノ・サウンドはそのままに スリム化を実現したコンパクト・モデル

CP1直系のサウンドと多彩な音色を 組み合わせた表現力豊かな演奏

CP50は、CP1直系のSCM音源を採用したコンパクトなステージピアノ。アコースティック・ピアノのほか、金属棒や金属板をたたくタイプのエレピ（RdとWr）、打弦式ピアノの名機CP80、DXシリーズでおなじみのFMエレピなど12種類のエレクトリック・ピアノのサウンドが内蔵されている。これらのサウンドは音域成分ごとのレベル調整や減衰時間、打弦ポイントやダンパーの効果などボイスに応じて用意されているパラメーターで音質を調整できるほか、フェーザー、フランジャー、コーラス、ディレイ、トレモロ、ディストーションなど多彩な効果を持つモジュレーション・エフェクト・ブロックやパワーアンプ／コンプレッサー・ブロックのパラメーターで緻密に作り込んでいくことができる。そのほかに215種類の楽器音を内蔵しており、ピアノ音色と組み合わせることによって表現力豊かな演奏を楽しめるのだ。またこうした音色の持つ細やかなニュアンスを最大限に生かすべく、音域ごとに異なる重みを再現したグレードハンマー鍵盤を採用しており、弾き手の思いがストレスなく音として表現できるような楽器に仕上がっている。

充実したコントローラーや 録音／再生機能を装備

CP50ではこうしたアコースティック楽器を凌ぐ表現力に加えて、アコースティック楽器では絶対得られないようなリアルタイム演奏時のフレキシビリティが十分に考慮されている。

フロント・パネル左側には3つのノブとボタンが用意されており、組み合わせた3種類の音色（パート）をワンタッチでオン／オフしたり、バランスを調整したりすることができる。1曲の中でも音楽の展開に応じた音色の選択が可能になっているのだ。中央と右手に3つずつ配されているノブも欠かすことのできないアイテムだ。右手のノブは3バンドのマスター・イコライザー。中央3つのアサイナブル・コントローラーには上記のパラメーターを3つまで割り当てておくことができる。余韻の長さやエフェクトのかかり具合などを割り当てておけば、演奏中でも状況に応じてリアルタイムに微調整することが可能だ。

CP50には100パターンのプリセット・リズムが内蔵されているほか、WaveファイルやMIDIファイルを読み込んで再生させることもできるので、パソコンなどで作り込んだオケをバックに演奏することもできる。また、CP50での演奏を本体に録音することも可能。さらに、CP1、CP5同様に、DAWソフト、Cubase AIが同梱されているので、パソコンさえ持っていれば、すぐに音楽制作環境も整ってしまう。

1台さえ持って行けば何でもできてしまうというのがCP50の大きな魅力と言えよう。しかも、フラッグシップ・モデルCP1に搭載された最先端のSCM音源を手ごろな価格で手に入れることができるのだ。コンパクトなボディに充実の機能を搭載したCP50は、まさにコストパフォーマンスに優れたステージ・キーボードである。